

圖 版 解 說

二三 釋迦如來說法圖繡帳

京 都 勸 修 寺 藏

繡製 屏裝 竪二米七・三寸(六尺八寸四分)
横一米五八・四寸(五尺二寸二分)

(白畑よし「勸修寺繡帳の技巧に就いて」参照)

三四 釋迦如來像

京 都 神 護 寺 藏

絹本着色 挂幅裝 竪一五九・四寸(五尺二寸六分)
横八五・四寸(二尺八寸二分)

藤代佛畫の精品、就中類例の尠い如來像として誰知らぬものなき名品である。

即ち斯代の諸菩薩がこよなき莊嚴に佛身を交飾した間に在つて、之は同じき透彫唐草光を負ひ、七寶莊嚴の九重座に在すとは云へ一切の嚴飾を離れた如來のおほどかなる姿である。相好あくまで圓滿端正にして、紫磨金身を包む衣文の緩やかにたゆたひ、而もその朱色の時と共に沈んでまた愈明かなる、正しく上代佛畫中の首班に列る。而も時代の好尚は此處にもよく意匠の限りを盡し、その満面の切金と五彩との文様は之に餘の菩薩像に劣るなき優麗を添へ得た。今この諸文を見るに、切金文に衲衣の花入七寶繫及び立涌、裙の花入三重襷、光背及び臺座の諸小型七寶、または光背の菊、劍菱、臺座の花入二重襷、寶地の襷格子等があり、彩文には衲衣の花丸文、衣縁及び臺座の寶草華、牡丹、蕨手等の各種の唐草、框板の花入龜甲、臺座蓮瓣寶瓶等の縹緗文等があつて、その種類、形式、配色共に藤代手法の典型をなしてゐる。

なほ之を當代の他品に比せんとすれば、臺座の形式竝に莊嚴は益田家十一面、また或はやゝ時下るかに見えるがボストンの馬頭明王に最も近く、その光の向

圖 版 解 說

背をも合せ考へたるかに見える明麗な配色は甚目寺不動の瑟々座にも通じて當代の色感を徴すべき好例である。衲衣の花丸文は大治の東寺十二天の豐華を去つてやゝ纖柔、これまた甚目寺像のそれに近い。光背の寶相華唐草は最もその特色を見るに足らう。唯繪畫には比較に乏しいが、例を工藝の著名なるものに採れば鳳凰堂天蓋のそのの豪華には再び至らずとして、恐らく中尊寺金色堂須彌壇或は神照寺華籠本誌第一九號のそれ等が粗密相異りつゝも互に上下するかに見える。若し之等に切金の手法の當代の至醇なるものに比してやゝ固味を示す點を併せ考ふれば、本圖の製作は自ら當代の末期に當るであらう。尊形の形式もまた之を裏切るものではない。その豐滿なる軀肢と云ひ、柔かき反隈の使用と云ひ凡て藤期のあくまで優麗なる範型を出でぬながら、相好の描線は整正に至り盡して却つて陰影に乏しき憾すらなしとせず、むしろ次代への過渡を暗示するかに見える。本圖の在るは恐らくは藤代佛畫掉尾の金字塔たるの位置であらう。(渡邊)

五六 傳雪舟筆 耕作圖 東 京 大橋新太郎氏藏

絹本着色 挂幅裝 竪六〇寸(一尺九寸八分)
横一二四・八寸(四尺一寸二分)

この一幅は本誌第三號所掲花鳥圖屏風、及び益田兼堯像、潘閔騎驢圖等と共に雪舟終焉の地と傳へる石見なる益田家に傳へられて、花鳥圖屏風は文明十五年益田宗兼の襲祿の祝として雪舟の描き獻せるもの、この圖はまた益田氏の耕作を覽るを雪舟の寫せるものと云ひ、雪舟畫中最もその傳來を徴すべき一とせられてゐる。而してこれを之等作品自身に省るとき、兼堯像には既に文明十二年の周鼎の贊文を載せて少くも所傳當時の資料たるを示してゐるが花鳥耕作共

三五

に無款、而も花鳥圖に在つてはその格致よくこの種の他の傳雪舟畫を凌ぐものながら、直ちに之を雪舟其人の筆に擬せんにはなほ多少の様式上の疑問を残してゐるものである。本誌第三號熊谷氏の論文参照 茲に之を本圖に見るに、少くも様式上には

遙にこの兩者を超えて雪舟畫の一般に近く、同時に畫趣もまた甚だ高きを知る。即ち樹下に童子を從へて崖下の稻を刈る様を見るは正しく領主其人であらうが、この稀有の構圖をか馬氏が樹下高士圖に借り來つた妙想を稱すべく、背後に見ゆる岨道は無きを妨げぬ感はあるながら、重疊した構圖を好む作者の習癖をも窺はしめ、田圃中の五人に至つては意を寫實に求め出で、而も筆趣愈輕脫なるを見る。その粗放巧まざるに似てなほ甚だ堅確なる構圖と云ひ、秃尖二種の筆を分つて犀銳朴剛の抑揚の變を盡す用線と云ひ、之をその畫品よりして雪舟其人に擬するも多く愧づるなきものであらう。

乍然之を直ちに雪舟の蹟とせんには此處にもまた、畫法の細に於て多少の異とすべき點がある。皴法の輕雋味は或は毛利家の長卷に近く、樹形また往々彼の畫に見らるゝものとするも、田圃中の人物に至つては寧ろ一般の雪舟畫中に甚だ見出し難い。由來彼が日常の風俗を寫せるものは既に聞く事甚だ稀である。技は或は此處に至つたと見得るかも知れぬ、然し少くも其間に通する一味の輕趣は確かに珍らしとすべきであらう。唯本圖に注意すべき事にその紙繼がある。本圖は楮紙數枚を縦横に而も不規則に繼げるもので、之を領主の家に納めたが爲に作れるものとしては稍解し難く、恐らくは稿本と見るべきものである。此處に於て吾人は一應この本圖の輕趣を或はそれが稿本なるが爲ならざるかと考へて見る事は出来る。然し假にこの疑問を容すにしても例へばかの天橋立眞景の同じく無款にして紙繼また多く、而も秃剛の筆を駢つて圖中の書入れすらも呵成せる跌宕味が殆んど本圖に對蹠するが如きに見れば、かくてもなほ本圖に雪舟畫としてやゝ特異なる輕味あるは否み難い。若しこの點を強調すれば以て雪舟に甚だ近き一別畫人の手に出でたとすべきかも知れぬ。併し之を畫品に省て今日到底之に擬すべき人を見出し難いとすれば、姑く之に傳來を参照して、

かの橋立眞景の如きと並べて雪舟中の一畫態に數へ置くことは寧ろ止むを得ざる推定であらうか。(渡邊)

七 細川昭元夫人像 京都 龍安寺藏

絹本着色 挂幅 竪七五・七厘(二尺五寸) 横三二・七厘(二尺八分)

細川昭元夫人は名於犬、織田信秀の女にして信長の妹に生れ、初め尾州大野城主佐治爲興に嫁して一男を生み、世に大野殿と稱したが、爲興の戰歿後攝州芥川城主細川昭元に再醮し、一男二女を擧げて、天正十年九月八日掩粧した。法名靈光院殿契菴宗倩。その乳母某氏之が追福の爲に龍安寺中浴室の北に一字を創つて靈光院と云ひ、妙心寺四十四世月航宗津一に玄津を乞うて之が開基とし、堂中に夫人の像を掲げ祀つたと傳へる。この圖或は之に當るものか。圖上に載せる月航の着贊は夫人逝去の翌十月に當るが、文中既に斯院の建立の事に及んでゐる。大日本史料第十一編之三、天正十年九月八日の條には夫人の史料を掲げること甚だ詳かである。以下の本圖贊文は之に據つた。

靈光院殿契菴倩公大禪定尼有像讚

生尾州織田家、爲塞外副將之貴眷、據京洛細川室、做天下管領之尊堂、綺羅叢裡芳聲美譽、錦綺堆中濃沫淡粧、鬢髮紅映餘輝媚、明鏡照心破冥途幽暗、蛾眉翠黛太瀟灑、念珠合掌祈家運延長、政德治國雖同姪姪、壽夭在天弗異彭殤、楊妃觀音現身、認蓬島到日域、茜施彌勒應化、將兜率擬洛陽、箇々圓成實性、鹿々本有故鄉、雨打梨花蛺蝶飛、當著倩女離魂話、風吹柳絮絮毛毳走、的得勝光度脫祥、了知四大假合、會萬法無常、令子環侍訴天、捨父母則無可鳴顛、類親輻湊伏地、感慈愛則豈不奉月航錄作常宇、權立化城修證果、創建祠院稱靈光、聲花秀整、奕葉茂月航錄作昌宇、夕陽摠在海棠、咄咄原夫尊堂太夫人、平右相國小松遠裔也、短命而祖、孝子哀慕、繪月航錄作慈宇容求讚、仰瞻之容貌如生、曾道京師女叢內有聖菩薩、蓋謂之乎、

維時 月航錄作天年龍集壬午小春吉 正十之三

前妙心月航叟暮齡八十七襲誌焉

由來龍安寺は寶徳二年細川勝元の創立にかゝり、長く細川家の歸崇するところであつて、今同寺に勝元政元以下細川家譜代の像を傳へ、信長また妙心に淺